

4. 調査II ～用語の興味の調査～

4.1 情報・科学技術にかかわる用語について 各用語は、興味の度合を5段階評価として、図1の書式で○をつけてもらった。このような書式にあっては、ある用語に対して○をつけるとき、回答者は、既に回答したそれ以前の○の位置との比較において、いわば相対的判断の下に回答してゆくものと思われる。そこで、各回答者について、47個の用語に対する回答番号の平均値を求めたのち、改めて各回答を、その平均値より高いか低いかの2値データに変換した。つまり、「大いに興味がある」、「興味が小さい」の2つのカテゴリーに分けることとした。

	1	2	3	4	5
1. ネットワーク	-- -- -- --				
2. 創造性	-- -- -- --				
3. 統計的手法	-- -- -- --				
4. 意思決定問題	-- -- -- --				

図1 回答の書式

(横方向の1～5の数字の意味は表1(a)に記載)

そこで次に、「大いに興味がある」の人数を集計してそのパーセントを求めた。図2に集計結果の一部を示す。これは、平均値が70(%)以上の「大いに興味のある用語」と30(%)以下の「興味の少ない用語」のみとりあげて表示したものである。

これより、「(7) コンピュータ利用の学習方式」と「(20) コンピュータシミュレーション」がトップで80(%)となっている。そして、前節でのC⁺とC⁻のグループ別に集計してみたところ、次のことがわかっている。すなわち、グループC⁺では「コンピュータシミュレーション」がトップで91(%)であること、またグループC⁻では、「コンピュータ利用の学習方式」がトップで81(%)であること、特に、後者は、グループCにおいても78(%)とかなり高い数値を示していること。また「コンピュータシミュレーション」は、グループC⁻では76(%)とグループC⁺よりかなり低い値を示していること、などが明らかになっている。

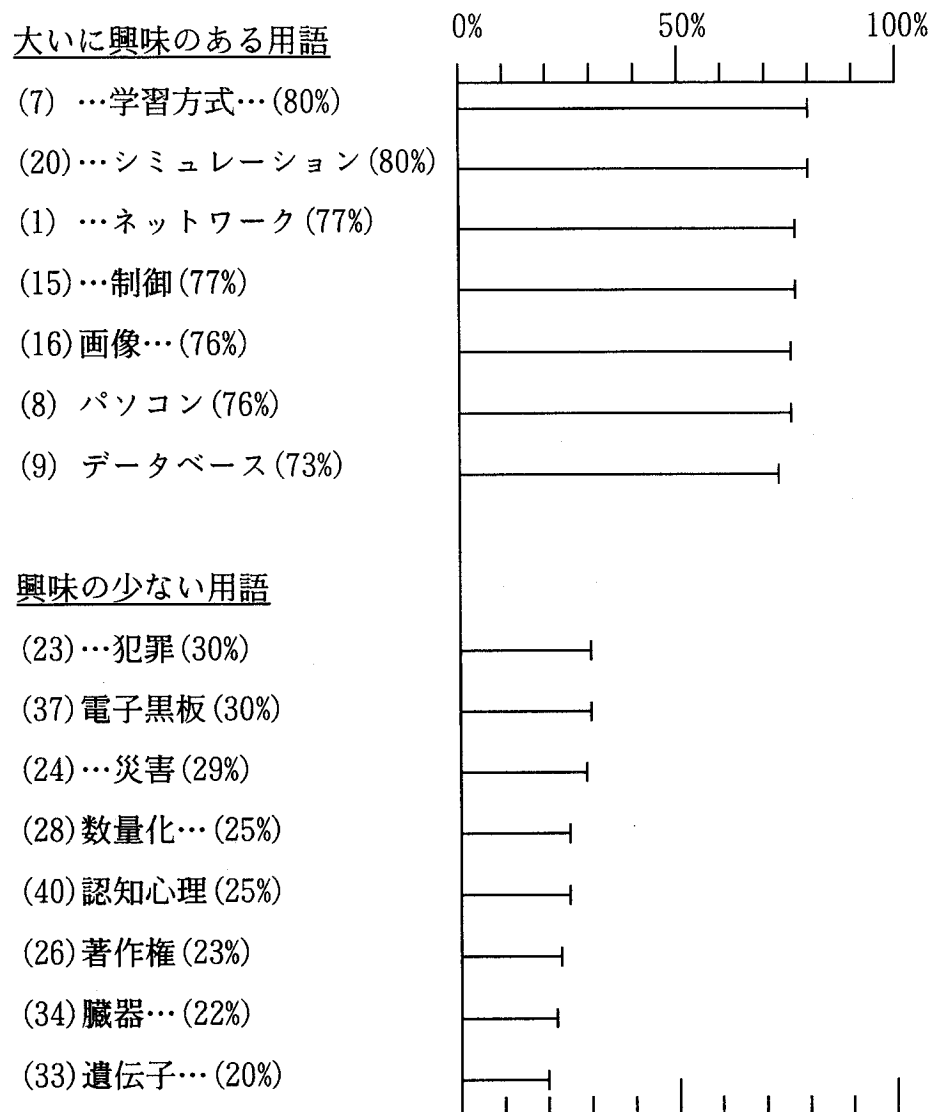


図2 情報・科学技術にかかわる用語の興味

また、「(14) CAI」なる用語も調査対象となっているが、グループC⁺の場合は「コンピュータ利用の学習方式」と同じく78(%)であったが、グループC⁻では60(%)であった。これは、CAIなる用語が、コンピュータ教育を主な業務としない指導員にそれほど普及していないことが一つの原因と思われる。

一方、「興味が少ない」ほうの用語を概観すると、情報教養にかかわる用語、科学技術に関連の用語であってもコンピュータと直接かかわりをもたない用語という特徴がある。

4.2 教育訓練にかかわる用語について 先の表2の各々について、上記と同様の手続きで回答処理を行った。やはり、「大いに興味がある」なるカテゴリーが70 (%) 以上の用語と30 %以下の用語を図3に示す。

これより、「指導技法」、「訓練効果」の順に興味が高いことがわかる。そして、グループ別に見ると、グループC⁺では、「指導技法」がトップで91%であること、また、グループC⁻では、「カリキュラム (86%)」、「指導技法 (86%)」、「訓練効果 (84%)」および「教育方法 (84%)」が上位の4つを占めていることなどがわかっている。さらに、グループC⁺においてトップであった「カリキュラム」は、グループC⁺では63%と低いことがわかっており、両グループ間の一つの相違点といえそうである。

一方、「大いに興味がある」が30%以下の用語を見ると、経営・政策にかかわるもの、「教育測定」とか「臨床的研究」などのように学術的用語とみなされながらも教育訓練現場には比較的馴染みの薄いものと思われるものが見あたる。

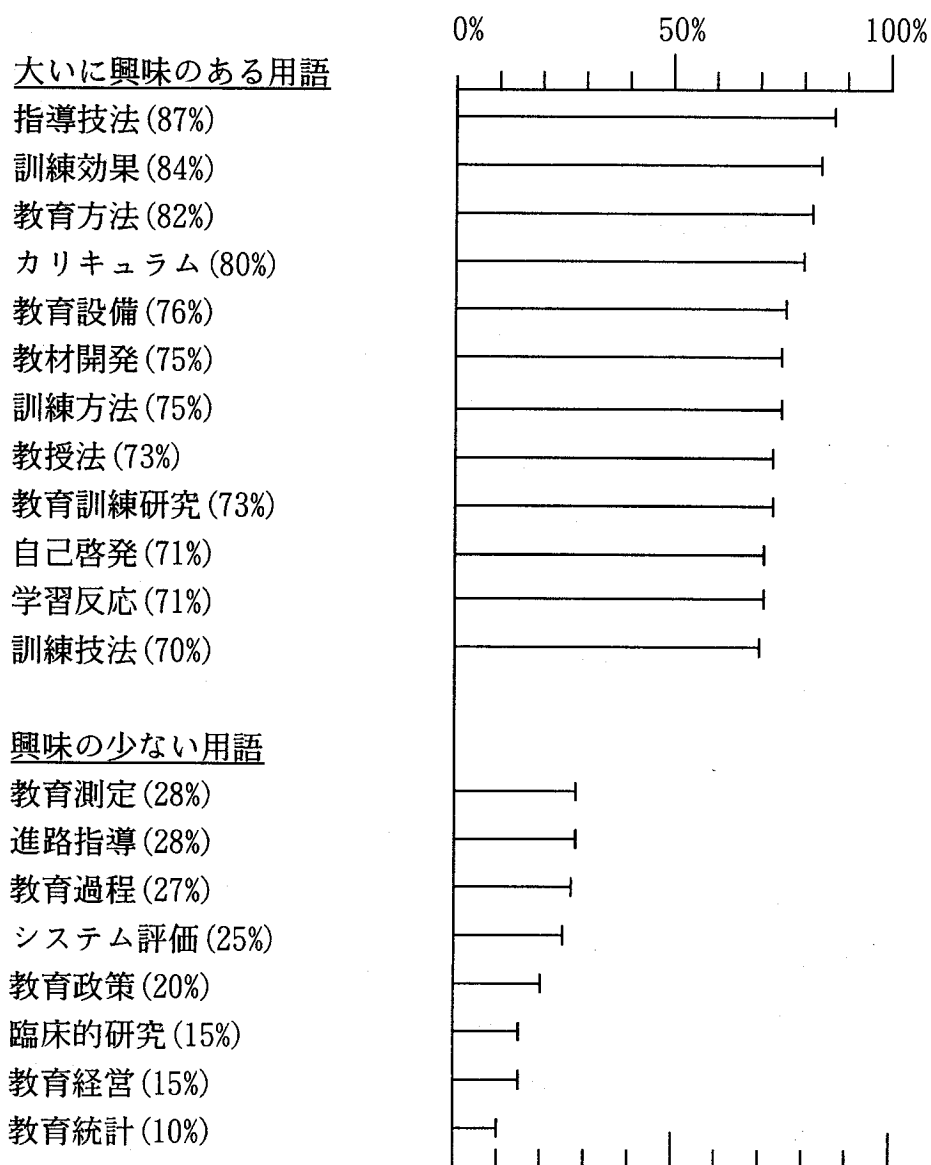


図3 教育訓練にかかわる用語の興味